

日高真実伝

— (東京) 帝国大学最初の教育学教授 —

The Biography of Mazane Hidaka

平 田 宗 史

(Munefumi Hirata)

第四部 教育科

(1998年8月11日受理)

はじめに

日高真実の名前を知っている人は、教育学研究者でも、何人おられるであろうか。知っておられる人でも、多分、樽松かほる氏が書かれた論文「日高真実における教育学の形成—日本教育学説史の一端緒」(『教育学研究』第48巻第2号 昭和56年6月)を通して、日高真実を知られた方々が多いのではなかろうか。管見によれば、この論文は、日高真実についての本格的研究の最初のものである。

私が、日高真実の名前を知ったのは、『教育人名辞典』(理想社 昭和37年2月20日)の「日高真実」の項においてである。それにおいて、日高真実について、つぎのように書かれている。

「ヒダカシンジツ 日高真実 (1865~1894)
(元治1~明治27)

宮崎県に生る。1886年(明治19)東京文科大学哲学科卒業、大学院にはいり、教育学を研究。1886年(明治21)7月、ドイツに留学、教育学を研究して1892年(明治25)2月帰国。帰国後東京高等師範学校教授兼 東京帝国大学文科大学教授となったが、間もなく病魔に冒されて、31才で没。彼は早くから教育学を研究し、『日本教育論』、『教育に関する研究』などの著書を公にした。『日本教育論』(1891, 明治24)は、わが国における社会的教育学の先駆とみられている。上下2編にわかれ、前編は「教育の想念」と題し、教育の意義・教育と社会との関係・教育と国家との関係などの諸項目にわたって教育の根本原理を述べ、後編はわが国教育上の実際問題に関して意見を述べている。彼にその萌芽を発したわが国の社会的教育学は、その後のヘルバルト学説によって一時衰退したが、

のち熊谷五郎、吉田熊次らによって再び提唱された。」⁽¹⁾

この本は、筆者の学部の学生時代に出版されたのであるが、印象に残っているのは、「宮崎県に生る。」の一句である。日高という姓は、宮崎県に、多い。「宮崎県に生る。」という一句に注目した。

宮崎県といっても、その地域は広く、宮崎県どの地域だろうかと、考えは広まる。彼は、筆者の生まれた町の隣の高鍋町で生をうけたことが分かった。筆者の祖先は、高鍋藩の藩士であったので、彼と藩校で、同じく学んだのではないかと、思うようになった。

日高真実は、筆者にとって郷里の大先輩であり、教育学研究の大先輩でもあることも分かった。是非、いつの日か、日高真実の伝記を書こうと思うようになって約35年余りである。それから、日高真実の資料を、コツコツと集めてきたのである。その間、前掲の樽松氏の論文が公刊されたのである。先を越されたと思ったが、それからも、資料を集め、福岡教育大学大学院生であった松本裕次君と共同研究するようになり、彼と、「日高真実の教育論」(『福岡教育大学紀要』第42号 第4分冊 平成5年2月)という論文を刊行した。

その後も、日高真実のことが気になり、ポツポツ、まとめる時期に来たのではないかと思うようになった。本稿は、完全なものではないけれども、この稿から、何か得てもらえたら、幸甚と思う。

注

- (1) この辞典には、かなりの間違いがある。
イ、「帰国後東京高等師範学校教授兼東京帝国大学文科大学教授」、正確には傍線の部分はいらぬ。
ロ、「31才で没」は、満29才で没。
ハ、「教育に関する研究」は、「教育に関する攻究」である。

これは、藤原喜代蔵著『明治・大正・昭和教育思想学説人物史』第一巻 明治前期編 東亜政経社昭和18年7月28日(再版)を参考にして書かれたものであろう。

第1章 訃報と弔辞

第1節 雑誌にみる訃報

日高真実(まこと)は、1864年10月17日(元治元年9月17日)に生まれ、1894年(明治27)年8月20日、逝去する。言うまでもなく、彼の逝去を悼む者は多い。家族ばかりでなく、恩師、友人、郷土の人々等である。

当時、全国的に名を知られた教育雑誌の『教育時論』は、彼の逝去について、次のように報道している。

「●日高真実の逝去 我国にて教育学を理論的に研究し、之を以て終生の事業と為さんと力めたりしは、當今に於て、ひとり文学士日高真実氏を推したりしに、氏は先月二十日、いたはしくも肺患を以て不帰の客となれり。教育界の為には、實に一大不幸なりと云はざるべからず、氏が肺患は、先年教育学専攻のため、独逸に留学せし際、過度の勉強をなせしに兆せしといえど、帰朝後帝国大学と、高等師範学校との教育学を多分に担当せしこと、其重なる原因となりしと云ふ。氏は丁寧周密の人なりし故、少しも胡麻化すが如きことを為さず、講義するに当りては、手の届かん限り、之が調査に従事せしを以て、夜は12時を過ぎざれば寝ず、朝は必東天の白む頃に起き出でて、孜々其職務を果たすことぞ、傷むべく又惜むべきの至りと云ふべし」(1)

この訃報の最大の特徴は、前途有為の日高真実が若くして亡くなったことに対する追悼の意を表明していることにあるが、その他、つぎの点には、注目すべきであろう。

一つは、教育学研究を終生の仕事と考えた最初の人であること。

二つは、肺患で亡くなったのは、留学中、および、帰国後の猛勉強の為だということ。

三つは、帰国後、帝国大学および高等師範学校で教育学を担当したこと。

四つは、胡麻化すことをしない、非常に真面目な性格であったこと。

つぎに、「日高文庫設立につき広告」(『大日本教育会雑誌』第156号 明治27年10月15日)の中で、つぎのように記している。

「凡そ世間のこと有為有望の士か大志を齎して早折するより哀しきはなし而して生等今文学士日高真実君に於て之を見る哀哉

君か一昨年の春を以て帰朝し高等師範学校教授兼文科大学教授に任せらるゝや一意其職掌を勤めその講義をなす夜々午前12時に至る友人皆その身体を傷ふを患へて忠告す君も亦之を悟らざるにあらす而も曰く余浅学非才なりと雖も苟も職に教授の任にあり教悔誘掖其宜を得ると否とは是れ余か責なり努めて猶ほ及はざるは奈何ともすへからざるも力の及ぶ限は之を盡さるを得ずと遂に大に健康を害し昨年2月病に臥す実に教授に任せられてより未た一年ならざるなり爾来治療看護其方を盡すこと一年半余竟に八月二十日を以て順天堂病院に没す享年僅に三十」(2)

この訃報も、先ず真実の死を悼んでいるが、この訃報の特徴は、つぎの点にある。

一つは、帰朝後、高等師範学校兼文科大学の教授になったこと。

二つは、講義の準備等に追われ、健康を損なうことになったこと。

さらに、東京大学時代、哲学を専攻していたので、『哲学雑誌』(九の九一、明治二七年)は、つぎのように報道している。

「○前文科大学教授文学士日高真実氏逝く。君は宮崎県の生まれにして幼より顛悟夙に出藍の誉あり。長ずるに及んで笈を負ふて東都に出で蛍雪の苦を積んで大学予備門に入り明治十六年進んで大学に入り哲学科を修め十九年七月こゝを卒業して大学院に入りて教育学を専攻せり。君は実に帝国大学令發布後はじめての卒業生なり。即ち君は帝国大学最初の卒業生にしてまた大学院入学の卒先者なりしなり。卒業の翌年文科大学英語学授業の嘱托を受け二十一年七月抜擢せられて教育学修行の爲め独逸へ留学を命ぜらる。学成りて二十五年一月帰朝し高等師範学校兼文科大学教授に任せらる(兼官は昨年九月免ぜらる。)君独逸に在るや孜々として其学の蘊奥を究めて倦むことなく、また鋭意独逸教育の現状を観察して怠ることなかりし、之れが爲め遂に肺患に罹るに至れり。帰朝後精勤勉勵教授の職を盡して其身に病あるを知らざるものゝ如し、職閑また筆を取りて日本教育制度を論ぜり着眼奇警議論周到甚だ見るに足る。而して病漸進して客年の二月に至りて病勢頓に重きを加へたり。君これより多く病床を離るゝを得ず、治療怠りなかりしが薬石功を奏せず、去月廿日

終に溘然として長逝せり。行年僅かに三十一。春秋に富み、学識に富み、才に長じ氣に勝るの身を以て君今輒ち逝く。豈痛惜に堪へんや。思ふに君にして病魔の犯す所とならず、天また君に齡を仮すに吝ならざれば、必らずや其造詣する所大に見るべきものあらむ、而して君今や乃ち亡し嗚呼哀哉」⁽³⁾

前述の二つの訃報と異なるところは、彼の出生地の宮崎県から始まり、彼が亡くなるまでの経歴を簡にして、要を得て書いてあることである。

最後に、彼の郷土の雑誌である『高鍋郷友会報告』(第18号 明治28年3月)は、真実の訃報をつぎのように報道している。

「●日高文学士 文学士日高真実君ニハ予テ肺結核病ニ罹ラレ久シク療養中ナリシ処薬石効ナク遂ニ客年八月溘焉逝去セラレタリ君ハ郷友中有数ノオ子ニシテ夙ニ嚴父如淵居士ノ教育ヲ受ケ漢籍ニ通シ後東京英語学校文科大学等ニ於テ漢洋ノ書ヲ学ヒ亦之ニ達セリ大学卒業後大学院ニ於テ専ラ哲学中教育ニ関スル事項ヲ研究セラレシカ後命ヲ受ケ独逸ニ遊学シ螢雪ノ効空シカラス目出度帰朝セラレ高等師範学校文学(科の誤り)大学ニ教授タリシカ非常ナル勉強ノ結果遂ニ病魔ノ犯ス所トナリ万人ノ涙ノ中ニ遠逝セラレシコソ最トモ悲シキ限リナレ君既ニ逝ケリ青山墓地近衛兵營ニ對シ一新墓ハ建テラレヌ嗚呼哀哉君ノ履歴ノ大要左ノ如シ

日 高 真 実

元治元年九月十七日生

明治九年東京英語学校ニ入学 同十年同校ノ東京大学予備門トナルニ及ヒ自然ニ移ル 同十五年東京大学文学部ニ入り哲学ヲ修ム 同十九年文科大学卒業大学院ニ入り哲学科中教育ニ関スル事項ヲ研究ス 全二十一年七月独逸国留学ヲ命セラル 同二十五年二月帰朝 同年三月高等師範学校教授兼文科大学教授ニ任セラル、高等師範学校教授トシテ五級俸(但当分千円支給)文科大学教授トシテ四百円支給セラル 同年二十六年五月四級俸下賜 同九月兼官ヲ免セラル全六級俸下賜(同二十七年八月逝去)」⁽⁴⁾

この訃報から、前掲の三つと異なり、幼少の頃から漢学者である父から漢学の指導を受け、郷土の期待を担っていたことが察せられる。

第2節 外山正一の弔辞

外山正一は、日高真実の恩師である。日高が亡くなった時、弔辞を読んだのは、彼である。彼の

経歴を見てみよう。

彼は、1848年10月23日(嘉永元年9月27日)、江戸小石川柳町に生まれる。幼少においては、漢学と武術を学んだ。1861(文久元)年には、蕃書調書に入って英学を学ぶと同時に、箕作麟祥の塾でも、それを学ぶ。学進み、開成所教授方となる。1866(慶応2)年、幕府の留学生として渡英、2年後の1868(明治元)年、帰朝し、静岡学問所の教授となった。1870(明治3)年10月、弁務少記として米国に派遣され、森有礼の下で、外交の仕事に携わった。1872年2月には、職を辞め、ハイ・スクールに入り、普通学を1カ年半学ぶ。1873年9月、ミシガン大学に入り、哲学、理学を修行し、1876(明治9)年5月帰国する。同時に、東京開成学校教授に任命される。1877(明治10)年4月、東京大学が設置されると、文学部教授に任命される。その後、1881(明治14)年、文学部長、1886(明治19)年3月には、東京大学総理事務取扱となる。その間、彼は、英語・英文・論理学・心理学・西洋歴史等を講じた。彼は、日高真実の大学生時代の恩師である。外山は、その後、1888(明治21)年、文学博士の学位を得、1897(明治27)年、(東京)帝国大学総長、翌年、文部大臣となる。そして、1900(明治33)年3月8日、亡くなる。経歴を見ても分かるように、外山正一は、日高真実にとって、恩師でもあり、上司でもあった。彼の弔辞は、つぎのとおりである。

「弔辞(明治27年8月22日作)

諸行の無常なるは人皆之を知る。死生命在るは又之を知らざる者なし。

然れども。有為多望の士の不幸短命にして死するを見れば。何人も之を悲まざる能はず。其の人の為めに哀むなり。親戚朋友の為に哀むなり。国家の為に哀むなり。

今や文学士日高真実君の遠逝に当て。殊に哀惜に堪えざるものあり。

篤実人は人に最も欠くべからず性質なり。然れども。之を具ふるの人未だ世に多きに非らず。

勉強は事を成就するに最も必要なる条件なり。然れども。勉強家は世に多なるにあらず。学才は学者の最も多く有するを欲する所なり。然れども。其の乏しきを憂ふる者実に少なしとせず。

日高君の如きは。其性質極めて篤実にして。且つ頗る学才ありて。而かも勉強心に富まれたる者なりき。

君の学生として大学に在るや。品行方正学力優秀を以て常に称せられたり。

君の特性にして就中賞讃すべかりしは。世人動

もすれば奢侈に流れ易き今日に於て。常に極めて質素を旨とし。官禄位階あるの日に至ても。昔日学生生徒たりし時と。少しも異なる事なかりしの一事成なり。

然れども。君の遠逝に際して。大学及び国家の為に更に愁ふべき者あり。

本邦教育の事業たる。稍、完全に赴きたりと雖も。改良を加ふべきの点尚ほ決して少なからず。蓋し。教育学の未だ充分に研究せられざるが為めなり。

教育学者を以て自ら任ずる者。輒近本邦に少なからず。然れども。深く哲学を修め。其基礎に依って教育学の実践考究を謀りたるは。実に君を以て嚆矢とす。

君の海外に於て。深く教育学を修めて帰朝せらるゝに当てや。大学は実に良教師を得。

教育界は無比の研究家を得たり。

是に於て。本邦の教育学は將に大に勃興せんとしたり。

然るに。此の多望ある学士は。忽地にして遠逝せられたり。

左なきだに哀を催す秋の時に。良夫を失へる妻あり。孝子を失へる親あり。良友を失へる友あり。良師を失へる学生あり。国家は良公民を失ひたり。大学は良教授を失ひたり。教育界は熱心なる研究家を失ひたり。実に悲の至に勝えざるなり。」⁽⁵⁾

日高真実の恩師であり、上司でもあった外山正一は、真実の死を悼んで、以上のような弔辞を述べているが、それをまとめてみよう。

一つは、きわめて篤実の性格で、かつ、頗る学才があり、しかも、勉強心に富んでいたということ。

二つは、学生時代、品行方正学力優秀であったこと。

三つは、帝国大学教授となっても、学生時代と変わらず、常に、極めて質素であったこと。

四つは、教育学者を以て自ら任ずる者は少ないけれども、深く哲学を修め、その基礎の上にたって教育学の実践考究を謀りたる嚆矢であること。

日高真実の恩師であり、上司でもあった外山の弔辞の内容は、以上のように、まとめられる。

また、真実の友人であり、義兄弟でもあり、明治・大正時代の教育界に大きな足跡を残した沢柳政太郎は、後年、彼について、つぎのように述べている。

「日高はあらゆる方面より見て完全なる人であった。しかも各方面に抜群の長所をもって居った。予が縷々日高にして生きて居ったならと云う愚痴を繰り返すのも決して無理ではなからうと信じる。」⁽⁶⁾

以上、訃報、弔辞、回想等を通して日高真実を見てきたのであるが、どれも、彼は、学識、識見、人格等、大変秀れていたという。お世辞とは、思えない。名のとおり真実であったであろう。

それでは、真実のような人物が、どうして生まれたのかを考えてみよう。真実の人間形成に於いて重要なのは、彼が生まれた高鍋藩という風土、彼が生まれた日高家、彼の通った学校、そして、そこでの友人および教師、彼の育った時代等々である。

注

- (1)『教育時論』第338号 明治27年9月5日 27～28頁。
- (2)『大日本教育会雑誌』第156号 明治27年10月15日 5頁。
- (3)『哲学雑誌』9の91 明治27年 722～723頁。
- (4)『高鍋郷友会報告』第18号 明治28年3月 頁なし。
- (5)外山岑作著『>山存稿 後編』湘南堂書房 昭和58年12月15日(復刻版) 293～294頁。
- (6)沢柳全集刊行会『沢柳全集』第2巻 大正14年6月25日 480頁。

第2章 高鍋藩と日高家

第1節 高鍋藩とその教育

日高真実(ひだかまぎね)⁽¹⁾は、高鍋藩、現在の宮崎県児湯郡高鍋町に生まれる。高鍋町は、宮崎市と延岡市とのほぼ中間地点にあり、太平洋に面した町である。

地理学的に言うと、東経131度32分50秒～131度26分40秒、北緯32度05分～32度10分に位置し、東西9.8キロメートル、南北6キロメートルで、面積43.53平方キロメートルである。1975年から1979年までの5年間の年間平均気温16.9度C、降雨量2,374.4ミリメートル降雨日数131日、降霜日数38日で、比較的温暖な気候の町である。そこに、1989年1月1日現在、23,247人(男子11,435人、女子11,812人)の人々が住んでいる。⁽²⁾

高鍋町は、『歴史と文教のまち』を謳い文句としている。

図 (I-①)

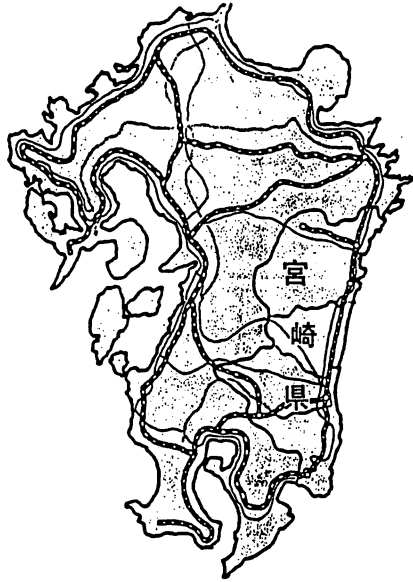
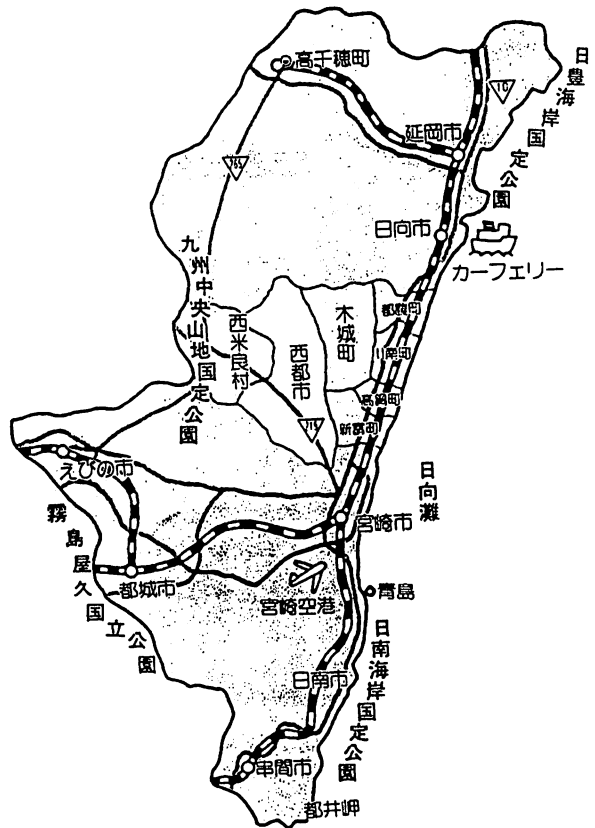


図 (I-②)



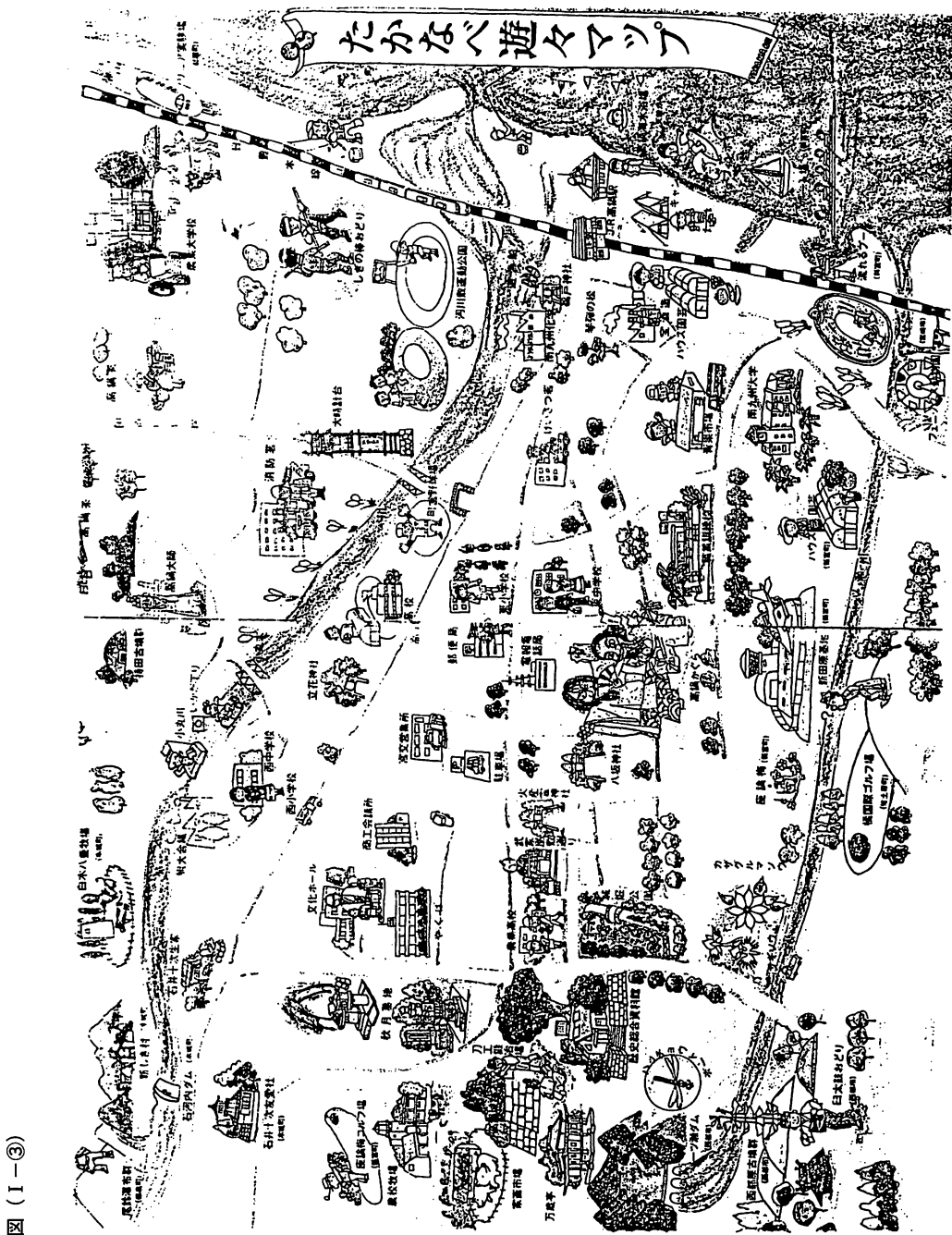


図 (I-3)

そして、この町から、高鍋藩主の次男として生まれ、上杉家の養子となり、のちに、米沢藩主となって、江戸時代の3名君の一人といわれている上杉鷹山 (1751~1822)、来遊中のロシア皇太子

を大津市内で巡査が襲って負傷させた大津事件で、司法権の独立を守った大審院検事総長三好退蔵 (1845~1908)、岡山孤児院を創設し、孤児の父と言われている石井十次 (1865~1914) などの歴

史上の人物を輩出している。

つぎに、現在の高鍋町の基礎を創った高鍋藩の歴史を見てみよう。高鍋は、古来、財部（たからべ）と称し、土持氏→伊東氏→島津氏が襲封し、豊臣秀吉が九州征討を終えると、1587（天正15）年8月、秀吉の命によって、秋月種実が筑前国秋月から櫛間（宮崎県串間市）へ移封され、その子種長が財部（高鍋）に入城した。1600年の関が原の戦で、はじめ西軍に、のち東軍に与した種長は、3万石を安堵された。そして、1604年11月、櫛間にあった居城を財部（高鍋）に移した。その領内は、高鍋（13郷27村）を中心として、飛び地の福島（8郷18村）と諸県（4郷9村）であった。種長の後、種春（2代 1614～1659）→種長（3代 1659～1689）→種政（4代 1689～1709）→種弘（5代 1709～1734）→種美（6代 1734～1760）→種茂（7代 1760～1788）→種徳（8代 1788～1807）→種任（9代 1808～1843）→種殷（10代 1843～1871）と襲封された。

5代種弘までは、家督相続紛争、一揆多発などで、財政事情は悪く、幕府から3千両を借金したほどであった。6代種美になって、やっと、財政再建の目途がつき、7代種茂になると、財政も一応確立した。彼は、「まず政務を統一するため総奉行を新設し、新田開発をすすめ、藩直営の木材、木炭、紙の生産、朝鮮人参の栽培等積極的な打開策を推進した。また、法令11条を定め綱紀の肅正を徹底し、一応の成功を収めた。」と、言われている。

1735年の藩内総人口は、3万4900人であったと言われているが、高鍋藩の総人口は、明治になるまで、殆ど、これと変わらなかったものと推察される。

高鍋藩の藩士の格は、表（I-①）のように、給人→小給→中小姓→徒士→組外→足軽→手廻→職人→雑役に分けられ、そして、その上・中・下三階層別知行高表は、表（I-②）の通りである。

表（I-①）高鍋藩士の格（諸士・組外・奉公人）

格（諸士・組外・奉公人）	
給人	（凡60～300石）世襲と一代の給人がある（上士）。
小給	（凡30～60石）もと大小姓。世襲と一代の別がある。
中小姓	（凡15～50石）御床几廻ともいう。世襲と一代の別がある。
徒士	（凡10～37石）世襲と一代がある。
組外	
足軽	用人頂と者頭頂に分けられ、それぞれ御組・鉄砲組・長柄組などに分けられていた。また美々津と福島には地足軽があった。
手廻	小頭・道具者・挾箱者・草履取・馬屋組
職人	普請方組・細工組
雑役	ほかに医師・茶道

注 木村礎他二人編『藩士大辞典』第7巻九州編
雄山閣 昭和63年7月5日 501頁による。

表（II-②）高鍋藩の上中下三階層別知行高表

階層	項目	人数	知行高	人数比率	知行高比率
上級	（小給以上）	95	10,189石	7	43
中級	（中小姓徒士）	322	6,356	23	27
下級	（組外諸奉公人）	944	6,738	68	28
	寺社	27	696	2	2
合	計	1,388	23,979	100	100

注 石川正雄「高鍋藩の歴史」『宮崎県地方史研究紀要』（第二輯）による。

高鍋町が、その『町勢要覧』で、「歴史と文教のまち」をキャッチフレーズにしているように、高鍋藩は、教育に力を入れていた。高鍋藩に儒学が入って来たのは、第4代藩主種政が、1707年、山内仙介を中小姓格30石で召し出し、儒学を講ぜしめたことに始まったと言われている。これに対し、兵学は、1686年、第3代藩主種長が、200石で、軍学者佐久間頼母を召し抱えたことによって、種が蒔かれた。

蒔かれた種は、第5代藩主種弘によって育てられ、つぎの藩主によって、大木となって行く。彼は、学問、武芸等に熱心で、藩士の子弟にそれらを奨励した。種美の後を継いだ第7代藩主種茂は、人材を登用し、家臣の献策に耳を傾け、高鍋藩の黄金時代を作り上げた名君であったと言われている。8歳年下の弟は、上杉家の婿養子となり、後に、江戸時代の3大名君の一人と言われている上杉鷹山である。兄弟ともに、治政に秀れていた。

種茂は、教育改革にも積極的に着手した。彼自身、徂徠学を修め、学問を好む傾向にあったが、藩士千手八太郎から、徂徠学は治政に役立たないと諫められ、宋学を学ぶようになった。また、角の屋敷稽古所での経学および兵学の講義を強化したり、藩士が元服する時や家督相続によって御番入りを願っていた時、出席状況や成績を調査したのである。それでも、出席が悪く教育効果が思わしくないもので、1775年、財津十郎兵衛と内藤進の両氏が学校建設の進言を行った。これは受け入れられず、2年後の1777年6月17日、千手八太郎が、藩主に提出した『学校造立の存寄』という進言が受け入れられた。その進言で注目すべき点は、つぎのことである。

一つは、小学と大学の設置を提言し、そして、小学は一つでなく、領内数箇所に設置する事を進言していること。

二つは、農家の子弟も、「農隙(すき)」の時には、それらの学校に出て来て、学ぶことを許可したこと。

三つは、学校の経費を藩費で賄うことを提案していること。

藩主種茂は、この進言を受け入れ、学校建設担当者が任命され、学校費用として、20人扶持(約36石)があてがわれた。⁽⁴⁾ 8月15日、建設の大綱が決まり、先ず、素読・手習(習字)から指導を始めるために、手習の間を作った。その建物は、南北流れの長屋で東正面であったという。11月には、師範後継者養成のため、大塚七郎治の伴太一郎を京都に遊学させた。

学校建設が着々と進み、学校開設が近づいてきた1778年2月9日、師範及び師範頭取の任命がなされた。師範3名、師範を助け、主として素読、手習を指導した師範頭取4名が任命された。

15日後の2月24日、開校式が行われた。学堂は、『明倫堂』と名付けられ、小学を行習齋(ぎょうしゅうさい)、大学を著察齋(ちよさつさい)と称した。講堂の正面には、藩主種茂が自ら推敲したという『明倫堂記』と墨色鮮やかに書いた赤味を帯びた板額が掲げられた。

開校式は、午前8時(5ツ時)から始まる。その模様を、『続実録』(巻之四)は、つぎのように記録している。それから、抜粋してみよう。

「○二十四日、学校普請成就し、開講は午前八時で、小学校において、千手八太郎が小学序を講じた。諸生、全員出席した。午前十時(四ツ時)、者頭以上の者が集合し、殿様が午前十時過ぎ、入室され、者頭以上の者の御目見えが行われた。大学校に於いて、財津十郎兵衛、千手八太郎、山内富太郎の三師範が、大学序を順次、講義した。

○御城では、学校落成式が行われた。お雑煮、お酒、お吸物が出され、者頭以上の者が参加した。終わって、お納戸の間において、能役者の橋本源蔵の仕舞があり、その後、又、お酒、お吸物が振舞われた。

○学校へ相詰め候役人を初め、学校建設にたずさわった人々、例えば、棟梁諸職人などにも、お祝が下されたのである。」

開講式当日の様子が、以上のように、報告されているけども、これから、藩主種茂の喜びと期待が感じられる。それは、種茂自身、自ら明倫堂建設の趣旨と教育精神を記した『明倫堂記』を書いたことから、推察される。

種茂に明倫堂建設を進言し、その開設に当たって師範の一人となった千手八太郎は、明倫堂建設都合(長官)手塚甚五左衛門以下の名の下に、明倫堂創設の由来を記した『明倫堂 間記』を作成した。また、明倫堂生の日常生活の規範となる『明倫堂学規』を作成した。これは、18の徳目からなる。

明倫堂は、小学と大学に分かれ、初め、小学を行習館、大学を著察館と言っていたが、後に、それらが、行習齋、著察齋に改められた。その所在地は、廉の屋敷というところで、前掲の『たかなべ遊々マップ』を見れば分かるように、現在地は、県立高鍋農業高等学校の運動場の西北隅のところである。建物は、南北に伸びた長屋で、東を正面

にしていたという。その西側には、1844 (天保15) 年、医学館、1853 (嘉永6) 年には、寄宿寮となる切惣楼が建てられた。

小学である行習齋には、小給以上の身分の者の嫡男は、八、九歳で入学し、素読・手習・躰方などの教育を受ける義務があった。それ以下の身分の中小姓・徒士の嫡男はなるだけ出席すべきこととし、そして、それぞれの二、三男でも11歳まで就学しなければならなくなり、就学が仕籍に入る条件となった。

入学しようとする者は、先ず、父兄の許を得る。そして、礼服を着用して師範 (教授) 及び師範頭取 (助教) の宅へ参上し、願い出る。但し、願い出る場合、幼年の者は、言うまでもなく、父兄同伴である。許可されると、麻上下を着用して出席する。

授業時間は、江戸時代においては、つぎの通りである。

午前9:00~12:00 習字

午後1:00~3:00 復読 (素読)

但し、3の日 (3, 13, 23)

8の日 (8, 18, 28)

午後1:00~3:00 習礼, 算術, 講書

但し、2, 7の日 (2, 12, 22)

(7, 17, 27)

午後3時以後助教の講義を聴く

4, 9の日 (4, 14, 24)

(9, 19, 29)

午後3時以後教授の講義を聴く

これが、1869 (明治2) 年、国学科が、設置されると、つぎのように改定される。

午前9:00~12:00 国学

午後1:00~3:00 習字

午後3:00~5:00 漢籍

(習礼, 算術は別席にて隔日開講, 生徒は輪番交代して業をち受ける。)

授業時間は、以上の通りであるが、『行習齋規』に基づき、生徒の日常生活をより詳細に見てみよう。

前述したように、授業は、午前9時に始まるのであるが、その前に、毎日、早朝、手水身仕舞いした後、兼ねて頼み置いた師家へ行き、素読を受けるのである。すなわち、これを「朝読み」と言うのである。それが終わって自宅に帰り、朝食をとって登校する。

教室の入退室においては、教授、助教、諸礼師範頭取等へ一礼をし、遅参した場合は、先生達ばかりでなく、出席生徒にも一礼をして着席しなけ

ればならない。座席は、格式及び入学の順序によらず、長幼の序、すなわち、年齢順である。

午前9時から12時までは、手習が行われるが、先ず、手本を読み、筆法に気をつけて練習し、1, 6の日には、清書して提出する。

午後1時から3時までの素読においては、朝読みで師家に教授されたところや、兼ねて習ったところを、一字一句に気をつけて繰り返し読むのであった。素読する書物は、孝経にはじまり、小学の内篇と外篇、大学、論語、孟子、中庸、近思録、詩経、書経、易経、春秋、礼記へと進むのであった。

習礼 (諸礼) においては、日常の礼儀を稽古するのであるが、日常の実用においても実行するよう心掛けるよう指導を受けるのであった。

算術 (法) は、初め、14歳未満の者に珠算の指導がなされたが、1867年から関流算法が教授されることとなった。

講書においては、孝経と小学 (内外篇) の講釈がなされるが、生徒は、メモをし、納得のいかないところは、納得のいくまで質問をすべきであるとする。

その他、授業中の態度、日常の立居振舞などについて、細かく規定している。

行習齋の以上の学科過程を修了すると、著察齋へと進む。その年齢は、15~6歳である。著察齋の学生は、購読したり、会読したり、講義を聴いたり、自由であった。しかし、一般的には、毎月6回、講書に参加するのが建前で、30歳で退齋となった。

藩士の子弟は、文武両道 (兼学) を教育の理想としていたので、学問ばかりでなく、武芸をも学ばなければならなかった。高鍋藩に普及していた武芸は、兵学、弓術、馬術、槍術、剣術、砲術、長刀、捕手術等であり、それぞれに、いくつかの流派があった。学問においては、藩士の身分によって教えられる内容が異なっていなかったけれども、武芸においては、身分に応じた教育がなされた。⁽³⁾

注

(1) 日高真実の名前の呼び方は、「まさね」と「まざね」の二つある。前者は、彼の著書である『日本教育論』や訳書である『教育に関する攻究』、そして、ベルリン大学に留学した折りローマ字で書いた登録簿に記されている。後者は、『高鍋町史』(高鍋町史編さん委員会 昭和62年6月1日)の第8編 (人物) の中では、「まざね」とある。父が日高誠実

(のぶぎね)、祖父が日高明実(あきぎね)と呼ばれていたので、『高鍋町史』では、「まぎね」を採用したのであろう。

- (2) 宮崎県児湯郡高鍋町『町勢要覧』 1989年による。
- (3) 明倫堂の教育については、つぎの著書および論文を参考にした。
 - (イ) 石川正雄 「高鍋藩の教育」 『宮崎県地方史研究紀要』 第3輯 宮崎県立図書館 昭和52年3月31日
 - (ロ) 石川正雄編 『明倫堂記録』 高鍋町 昭和58年3月30日
 - (ハ) 高鍋町史編さん委員会編 『高鍋町史』 高鍋町 昭和62年6月1日
 - (ニ) 拙稿「江戸時代における文武両道教育の研究(一)」『福岡教育大学紀要』 第40号 第4分冊 教職科編 平成3年

第2節 日高家と真実

一人の人物は、言うまでもなく、いろんな要素から形成された有機体である。そして、一人の人物が出来上がるには、背景がある。真実の場合もそうであろう。

その一つは、高鍋町が「歴史と文教の町」と言うスローガンを掲げているように、学問を比較的に大切にす藩に生まれたことである。

その二つは、中央の情報が入りに難い高鍋藩にあって、祖先が、比較的情報の入り易い、上方と高鍋藩を結ぶ美々津港に居住し、藩主所有の船の艦長であり、学問を愛する家庭に、真実が生まれたことである。

その三つは、真実が誕生して4年後には、幕府が崩壊し、明治維新政府によって近代日本国家の建設されようとしていた時である。

真実の人間形成を考える場合、以上の三つは、欠くことの出来ないものであるが、その第一は、前節で考察したが、第二を、この節で考察する。

日高家は、高鍋藩領である美々津で、藩主の艦長を務める家柄である。当主は、代々、乗太夫は善太夫を襲名し、身分は、士と奉公人との中間の身分である間格であったが、後には、徒士となった。しかし、それは、余り身分の高い地位ではなかった。⁽¹⁾

美々津は高鍋藩の参勤交代の玄関口であると同時に、経済的には、耳川上流から輸送される物資の集散地であり、藩御用の木材船、大坂方面からの船の出入りする港町であった。そこには、番代と代官が置かれ、高鍋藩の米蔵や出入りの船等を

監視する津口番所が設けられたり、藩主の宿泊施設であるお仮屋も設置されていた。

今でも、陸の孤島と言われ、交通の不便な宮崎県のはゞ中部に位置する高鍋藩において、京や都の文化が入って来る入り口が、美々津であった。したがって、「美々津で唄を歌うな」と言われていたように、美々津に出入りする船乗りや商人によって、上方での最新流行の唄が、逸速く、到来した。建物も、京都や大坂の町家造りの影響を受けていたと言う。

日高家が代々居住していた美々津は、以上のように、上方文化の到来する高鍋藩の玄関口であり、日高家は、藩主の艦長を務めた家柄であったため、上方文化に直接触れる機会もしばしばあったものと推察される。⁽²⁾

しかし、日高家が、高鍋藩の藩校明倫堂と関わりをもつようになるのは、日高明実(1809~1847)からである。彼は、1809(文化6)年、美々津に生まれる。父実義は、藩主の関船の船頭で、吟童と号し、和歌俳諧に長じていたという。

明実も、関船に乗っていたが、彼は、16歳の時、父に許しを請うて学問に専念することとなった。先ず、荒川嘯亭(1785~1868)に漢学を学んだ。嘯亭は、美々津に生まれ、始め漢学を学び、長じて医学を勉強し、医者となった人物である。特に、産科に精しかったという。そして、和歌、俳諧、囲碁、将棋、謡曲、茶の湯、生け花等に通じていた。彼の性格は、度量が広く、ユーモアに富み、人の面倒見がよかったので、人の出入りが多かった。

明実は、嘯亭に漢学を学んだ後、1830(文政3)年3月3日、22歳の時、豊後日田(現在の大分県日田市)の広瀬淡窓(1782~1856)主宰の咸宜園に入門した。淡窓の実家は、商家であったが、16歳の時、家業を弟に譲り、学問で身を立てる決心をした。1805年、24歳の時、彼は、日田に学舎を建てた。彼の学徳を慕い、全国から塾生が集まり、1871(明治4)年、塾が閉鎖されるまでの塾生の延べ人数は、4千人を超えたという。この数字は、今でも交通の不便な日田に笈を負うて集まって来たと考えるだけで、驚異である。彼の学問は、儒・仏・老の調和をとった折衷学派であり、彼は、漢詩文に長けていた。彼は、学者としてよりも、教育者として日本の歴史上に名を残した。彼は、「人材を教育することは善の最大なものである」と称し、人材育成に一身を捧げた。教育方法は、それぞれの人間の天性(個性)を伸ばす方法を採用した。

咸宜園の教育の特徴は、つぎの三つに要約されよう。

一つは、入門にあたって、「三奪の法」を採用したことである。すなわち、(イ)年齢、(ロ)学歴(前歴)、(ハ)身分を奪って、入門者を平等とした。当時重視された身分制、長幼の序よりも、本人の実力を重視したのである。

二つは、厳しい等級制を採ったことである。それは、無級から九級に分かれ、さらに、一級から九級までは、それぞれ上・下に分けられていたので、合計すると、十九段階に分けられていた。各段階毎に学習課目が提示され、毎月の学習成果が試験で評価され、進級が決められた。すなわち、月旦評による塾生の評価が行われていた。

三つは、生徒指導の塾経営の巧みさである。塾制を確立し、一人で約二百人の塾生を管理したのである。

以上の特徴を有する咸宜園から、多くの人材を輩出したが、幕末から明治にかけて活躍した歴史上の人物は、大村益次郎、高野長英、長三州、清浦圭吾等がいる。

日向(宮崎県)から咸宜園に入門した者は、淡窓時代(50年)、51名、青邨時代(7年)、4名、林外時代(10年)、6名、合計61名である。

そのうち、高鍋藩から入塾した者は、つぎの6名である。

入門簿によると、高鍋藩から咸宜園に入門した一番早い者は、鳥原玄竜紹介による日高明実(謙蔵)である。彼は、1830(文政13)年に、22歳の時、入門している。この年には、全国から56名の入門者がいる。その前年の1829年には、90名、その翌年の1831年には、75名と、広瀬淡窓の名声を聞いて、入門者が多くなって来ていたところである。⁽³⁾

入門年月日	住 所	氏 名	続柄 年令	紹 介 者
文政13, 閏3, 3	児湯郡美々津	日 高 謙 蔵	22	鳥 原 玄 竜
文化15, 3, 4	日向国小江(湯)郡浦(穂)北村	児 玉 敬 蔵		志賀守 右衛門
嘉永4, 11, 14	日向高鍋藩中	山 内 純 亮	山内庄次郎伴 18	毛 利 文 一
〃	〃	吉 田 伝之助	吉田銀蔵伴 22	毛 利 文 逸
〃	〃	植 松 常 節	18	〃
嘉永5, 4, 17	児湯郡高鍋称専寺	釈 護 城	16	吉 田 伝之助

『欽斎日曆 卷五』にも、「三日 日向人日高謙三入門」⁽⁴⁾とある。1830年3月に入門したのであるが、同年5月26日の『月旦評』で、初めて、

謙三の名前が「謙三加一級上」⁽⁵⁾とみえる。『月旦評』は、毎月の成績評価であるが、そのカリキュラムは、表(I-③)のとおりである。

表 (I-③) 咸宜園職任・カリキュラム一覧

書目配当表		教科及教科課程	
下 伝習録 近思錄	上 詩 文 百篇 五十篇	經學 職原學 和學	九級
張子 齊治通鑑	名臣言行錄 世説・荀子	職任制 副監 主簿 典業 舍長 副舎長 経営監 履監	八級
史記講義	遺思樓詩鈔 書經講義	蔵儀監 蔵書監 酒掃監 新米監 外來監 給事 夜直	七級
左伝講義	左伝講義	輪番侍史	六級
日本外史講義	孔子家語講義 孟子講義	授業 試業 會説 會説 復文	五級
十八史略講義	中庸講義	課業 素説 輪説 輪説 會説 會説 復文	四級
易經素説	国史略講義	表 刻 時 十二時 吹飯散歩	三級
小学素説	春秋素説	七時 酒掃吹飯 八時 素説會説 九時 素説會説 十時 應講會説 十一時 輪説復文 十二時 吹飯散歩	二級
大学素説	孝經素説	六時 長起掃除 七時 輪説 八時 試業 九時 同右 十時 同右 十一時 同右 十二時 同右	一級

注 奈良本辰也編『日本の私塾』角川書店
昭和49年5月30日 99頁による。

この表は、1833（天保4）年5月11日、「改塾長為都講」⁽⁶⁾と記されている以降の職任とカリキュラムである。すなわち、日高謙三が入塾し、勉学に励んでいる時以降のものであるけれども、基本的には、謙三勉学時代と変わらなかったものと、推察される。

謙三は、4級上までは、順調に昇級している。これは、入門する前に、かなりの学力を有していたからであろう。

1830（文政13）年	3月3日	入門
	5月26日	1級上
	6月26日	2級下
	7月26日	2級上
	8月27日	3級下
	9月26日	3級上
	11月26日	4級下
	12月22日	4級上
1831（天保2）年	2月26日	5級下
	6月26日	5級上
	10月26日	6級下
1832（天保3）年	5月26日	6級上
	9月26日	7級下 ⁽⁷⁾

5級からは、やや時間がかかっているが、他の

塾生と比べると、昇級は、順調と見て良いであろう。例えば、1832(天保3)年12月26日、「謙三罷塾長。龍甫代之。」⁽⁸⁾とあるように、謙三のあと塾長となった防州三田尻出身の永澤龍甫は、謙三の入門より1年7ヵ月前の1828(文政11)年7月24日、入門であり⁽⁹⁾、6級下(天保2年9月26日昇級)までは、龍甫の方が昇級が速かったのである。6級上では、謙三が、1ヵ月速く昇級している。そして、7級下では、2人が、「謙三。龍甫加七級下」とあるように、同時に昇級している。後に、謙三は、龍甫より速く、塾長になったが、謙三が咸宜園を去ってすぐ塾長の名称が都講と変わった。咸宜園に入塾し、後に、総理大臣となった清浦圭吾(1850~1942)は、その様子をつぎのように語っている。

「咸宜園の組織は、恰度内閣のようなもので、都講を首相とすれば、舎長としての内務大臣があり、外務大臣としての外来監があり、その他主簿、典薬、新来監、蔵書監、洒掃監、履監等の職員があつて、それぞれ自己の職務を管掌するさまは、恰度今日の閣臣が各省の事務を主管するやうなものであつた。こゝにおいてか咸宜園に都講たる者は、一国宰相の器と云ひ得るのである。」⁽¹¹⁾

謙三は、入門して二年位で、塾長(のち、都講と改称)となったが、1832(天保3)年12月26日の淡窓の日記に、「謙三罷塾長。龍甫代之」と記した後、「是日微困」と書かれている。⁽⁸⁾これは、謙三が塾長を辞めたことを惜んでいるのであろうが、翌年2月12日の日記に、「及謙蔵帰郷」⁽¹²⁾とある。それ以降、月旦評の中に、謙三の名前は出て来ない。彼は、退塾し、郷里美々津に帰ったのである。

咸宜園で塾長まで務めた謙三のことが、高鍋藩第9代藩主種任の耳に入り、同年8月17日、謙三の学力吟味がなされることとなった。

「右先達テヨリ豊後日田広瀬求馬方江致遊学候処当時帰郷罷在候之趣相聞候ニ付来月上旬中当表へ被召呼学校ニテ試候様被仰付候段被仰出候趣雄右衛門殿ヨリ御達有之尤美々津表へハ御奉行所ヨリ被仰付越候」。⁽¹³⁾

学力吟味は、翌月の9月7日、藩侯の御前で、書経の湯誓篇と堯典篇を古注によって講義させられることによって、行われた。書経講義は、咸宜園では、7級上で行うことになっていたが、謙三自身は、7級下までしか、進級していなかった。しかし、その講義は好評で、藩主は、その取り扱い方を命じた。⁽¹⁴⁾

これに対し、藩の学校御用掛は、1833(天保4)年11月26日、奉行田村雄右衛門を通して、つぎのように回答している。

それを要約してみよう。日高謙三を明倫堂に入学させるか、または、直ちに、江戸あるいは京坂へ遊学させるかを吟味いたしましたところ、学校予算が不足して、2~3年は、遊学させる費用がありません。しかしながら、大切な人材教育のことゆえ、費用にかかわりなく、遊学を命ぜられてもよいと思います。ところが、謙三は、折衷学派の広瀬求馬(淡窓)に学んでおります。学問というのは、一つの学問を修得した上で、他の学問の長所を取るべきで、始めから折衷学派を学ぶというのは宜しくないことと、費用不足ということから、一先ず、当地に呼び寄せ、学費を与えて、1~2年間、朱子学の基礎を学ばせる。そうすると、遊学費用の余裕も出来ますので、その後、2~3年、遊学させて、本格的に、朱子学を学ばせては、いかがなものでしょうか。⁽¹⁵⁾というような内容の回答がなされたのであるが、これが実行されたのは、1835(天保6)年からである。この年、謙三は、高鍋藩の迎賓館高鍋お飯屋中に召還されて、朱子学の基礎を学ばされていた。そして、翌々年の1837(天保8)年3月、江戸へ遊学することとなった。⁽¹⁴⁾

江戸では、古賀侗庵(1788~1847)の塾に入門した。侗庵は、寛政の三博士の一人といわれる古賀精里の三男で、幼い頃から「戯を好まず深沈寡黙群兒敬憚」⁽¹⁶⁾であったと言う。佐賀に生まれたが、父精里が幕府に使えるようになり、江戸に移住した。古賀の門は、古賀精里→古賀侗庵→古賀茶溪と続いた学問所付きの儒官の家柄で、1796(寛政8)年から1867(慶応3)年まで続いた儒流の名門であった。謙三は、そこでも、能力を発揮し、老中水野忠邦は、扶持百石をもって、彼を召し抱えようとした。⁽¹⁴⁾しかし、勿論、彼は、辞退した。

遊学して4年経った1841(天保12)年8月18日、藩主の面前で、『論語子路篇』を講義したり、詩文章を藩に差し出した。⁽¹⁷⁾吟味の結果は、翌1842(天保13)年4月22日、泥谷七之丞が助教を退役したのに代わって、謙三が、中小姓五人扶持で、明倫堂助教に任命されたのである。⁽¹⁸⁾翌年12月10日には、「一代小給格」に取り立てられ、教授となった。⁽¹⁹⁾

彼が教授に就任すると、明倫堂の学風は一変したと言われているが、就任して2年経った1845(弘化2)年12月11日、謙三は再度の遊学を願

出た。(20)それが認められ、彼は、翌年正月、大坂に遊学し篠崎小竹(1781~1851)に師事したのである。小竹は、謙三江戸遊学の時の師の父である古賀精里に朱子学を学び、詩文および書をよくした。その人物は、つぎのようであったと言う。

「人と為り闊達灑落、而も心を用ふる精細、事務に通達し、毫も書生迂疎の習あるなし。平生仕官を欲せず、然れ共諸侯の大坂に鎮戍する者、多くは聘して師となす。交道の広き、当時その比を見ず。」(21)

小竹は師の礼をうけず、朋友の礼をもって、謙三を遇したという。これは、謙三自身の優秀さを表しているとともに、小竹自身の学問追求における態度、すなわち、学問追求において年齢はかかわりのないという人間の大きさを表していると、推察される。

大坂に出て半年足らず経った7月、藩主種任侯は、幕府によって勅使御馳走役という大任を命じられたので、その補佐役として日高謙三を江戸へ呼び寄せられた。その大任を果たし、大坂へ帰って来たが、1847(弘化4)年1月29日、江戸遊学の時の師古賀侗庵が亡くなったのを後を追うようにして、謙三も、約1ヵ月後の2月27日、大坂の藩邸で不帰の客となった。その時、彼は、38歳である。正に、これから活躍が期待される年齢であった。(14)

日高謙三と同じ1809(文化6)年に生まれ、彼より数年前に咸宜園に入門した同門の士の秋月橋門(1809~1880)は、謙三の人物と学識を讃えて、『橋門韻語卷之上』の中に、「耳水訪日高東卿賦呈」(22)という漢詩を残している。

それによると、日高謙三は、温厚で、物静かで寡黙を愛し、悠々として、その態度は変わらず、両親に対しては、いつもにこやかに接し、事を行うには、誠心誠意をもって行い、名利を求めるところがなかったという。その両眼は、光り輝き、旭日の輝くようであった。また、学問を愛し、詩文を作るのに巧みで、書も上手であった。

病床に伏し、余命いくばくもないと悟った謙三は、看護の者に、つぎのように依頼したという。

「遂に君の恩に報いることが出来なかった。どうか長男誠実に、学問が完成した後は父に代って殿様の手厚い志におむくい申上げる様にせよと伝えて貰いたい。」(1)

夫人蔦子が、夫の死を知ったのは、死後20日ほど経ってからであると、言われている。その時、夫人は、33歳で、謙三との間に、3男1女をもうけていたが、長女の槩子は出生した年に亡くなり、

謙三の死後5ヵ月後に生まれた鶴千代も生まれて間もなく亡くなった。あとに残った長男誠実は、11歳、次男来助は、5歳であった。

夫人は、謙三が咸宜園に入門する前、漢学を学んだ荒川嘯亭の娘であった。彼女は、才色兼備の女性で、柔順貞静な人柄で、読書を好み、和歌を愛し、儒者日高謙三にふさわしい女性であったと言われている。

夫の死後、夫人は、2人の息子の養育に全力を傾けた。そして、孫の真実に漢学の基礎知識を与えたのも、彼女であった。

長男誠実は、1836(天保7)年2月29日、美々津に生まれる。1842(天保13)年4月、父が明倫堂助教になった時、彼は、父に連れられて、高鍋に移り、明倫堂で学ぶこととなった。彼の父が亡くなった年の1847(弘化4)年3月16日の『明倫堂記録』によると、誠実について、つぎのように記している。

「当時素読手習等出精仕侯篤実之生質器用ニ御座候間今通り出精仕侯ハ、行々家業相勤侯人物ト奉存候」(23)

2年後の1849(嘉永2)年2月5日の記録には、「十三歳ニテ小学四書近思録五経迄素読相済侯ニ付」(24)と言うことで、白銀五両の褒美を受けている。

1853(嘉永6)年には、藩校寄宿を命ぜられ、1856(安政3)年には、藩命により、江戸に遊学することとなった。江戸では、父謙三(明実)の師であった古賀侗庵の息子古賀茶溪(1816~1884)に学んだ。彼は、程朱学の家学を継承していたが、かたわら西洋の学術を修め、幕府の命を受けて西洋の学事を掌り、洋学所の学政を督した人物である。(25)彼に学ぶこと、7年、1862(文久2)年に帰藩し、明倫堂の助教となった。その翌年、内野軍平の娘喜那子と結婚したのであろうか、1864年9月17日、この本の主人公である日高真実が誕生する。この年、再命によって、再び、江戸へ遊学し、古賀茶溪に学ぶこととなった。

この頃は、江戸幕府は、欧米先進諸国の外圧に負け、外国へ門戸を開き、外国の文化・文明を無視することが出来なくなり、積極的に、それらを取り入れなければならなくなった。その幕府の中心の一人が茶溪である。

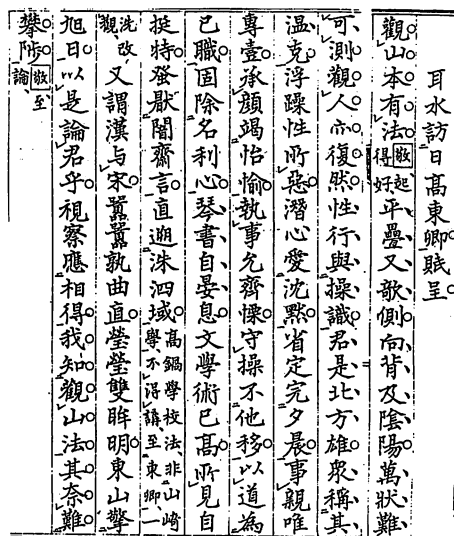
茶溪に約3年間、師事した後、藩命により、帰藩することとなった。それは、1867(慶応3)年の春のことである。途中、大坂に母蔦子と呼び寄せ、積年の母の望みである亡き夫の墓参をすることになった。それは、夫が亡くなって、約20年後

のことである。しかし、積年の望みを達した母と帰藩しようとする、誠実が病氣となり、やっと、11月に帰藩出来、藩侯の近侍となった。翌1868(慶応4)年7月4日、高鍋藩校明倫堂の教授に任命された。その年の9月、明治と改元され、新しい政府が出来ると、1869(明治2)年10月、高鍋藩に上下両議員事院が開設される。誠実は、下院議長兼務することとなった。翌年12月2日には、高鍋藩権大属に任命され、上京、公用方を申し付けられた。そして、その翌年の1871(明治4)年7月14日、廃藩置県となり、高鍋藩は廃止され、その残務整理の命を受ける。この年、夫(誠実)亡き後、2人の子どもの養育に尽力した、また、孫真実に漢学の素養を与えた母蔭子が亡くなる。残務整理が終わると、誠実は、1872(明治5)年3月3日、陸軍省9等出仕を命ぜられ、秘史局分課に勤務することとなった。翌年4月3日、陸軍大尉になる。そして、日高一家も上京することとなった。

注

- (1) 高鍋町立図書館長石川正雄氏児湯地方教育委員会連協総会当日講演資料(昭和56年7月6日)「日高耳水一族」日高耳水一族のことは、この資料に基づく。
- (2) 『角川日本地名大辞典 45 宮崎県』角川書店 昭和61年10月8日 729頁。
- (3) 井上義巳著『日本教育思想史の研究』勁草書房 1978年8月26日 426頁。
- (4) 『淡窓全集』中巻 日田郡教育会 大正15年11月10日 436頁。
日高明実は、又の名は、杲、字は東卿、謙三(謙蔵)と称した。耳水は美々川をもじった号である。別に安素堂ともいう。注(1)の講演資料による。
- (5) 同上書 442頁。
- (6) 『淡窓全集』下巻 日田郡教育会 昭和2年1月30日 526頁。
- (7) 『淡窓全集』の中巻と下巻による。
- (8) 『淡窓全集』下巻 513頁。
- (9) 同前書の「入門簿」巻22 33頁。
- (10) 『淡窓全集』下巻 505頁。

- (11) 後藤武夫著『子爵清浦圭吾傳』日本魂社 大正13年5月20日(三版)20~21頁。
- (12) 『淡窓全集』下巻 517頁。
- (13) 石川正雄編『明倫堂記録』宮崎県高鍋町 昭和58年3月30日 221頁。
- (14) 注(1)の講演資料による。
- (15) 石川正雄編『明倫堂記録』高鍋町 昭和58年3月20日 242~243頁。
- (16) 関儀一郎・関義直共編『近世漢学者伝記著作大事典』琳琅閣書店 昭和46年4月10日(第3版) 217頁。
- (17) 前掲書『明倫堂記録』 299頁。
- (18) 同上書 329頁。
- (19) 同上書 371頁。
- (20) 同上書 437頁。
- (21) 前掲書『近世漢学者伝記著作大事典』 257頁。
- (22)



- (23) 前掲書『明倫堂記録』468頁。
- (24) 同上書 518頁。
- (25) 『大日本人名辞書』第2巻 昭和12年3月30日(増訂 11版) 1000~1001頁。